Courier Correo Courrier

April 2017
Volume 32, Number 1

Mennonite World Conference
A Community of Anabaptist related Churches

Congreso Mundial Menonita
Una Comunidad de Iglesias Anabautistas

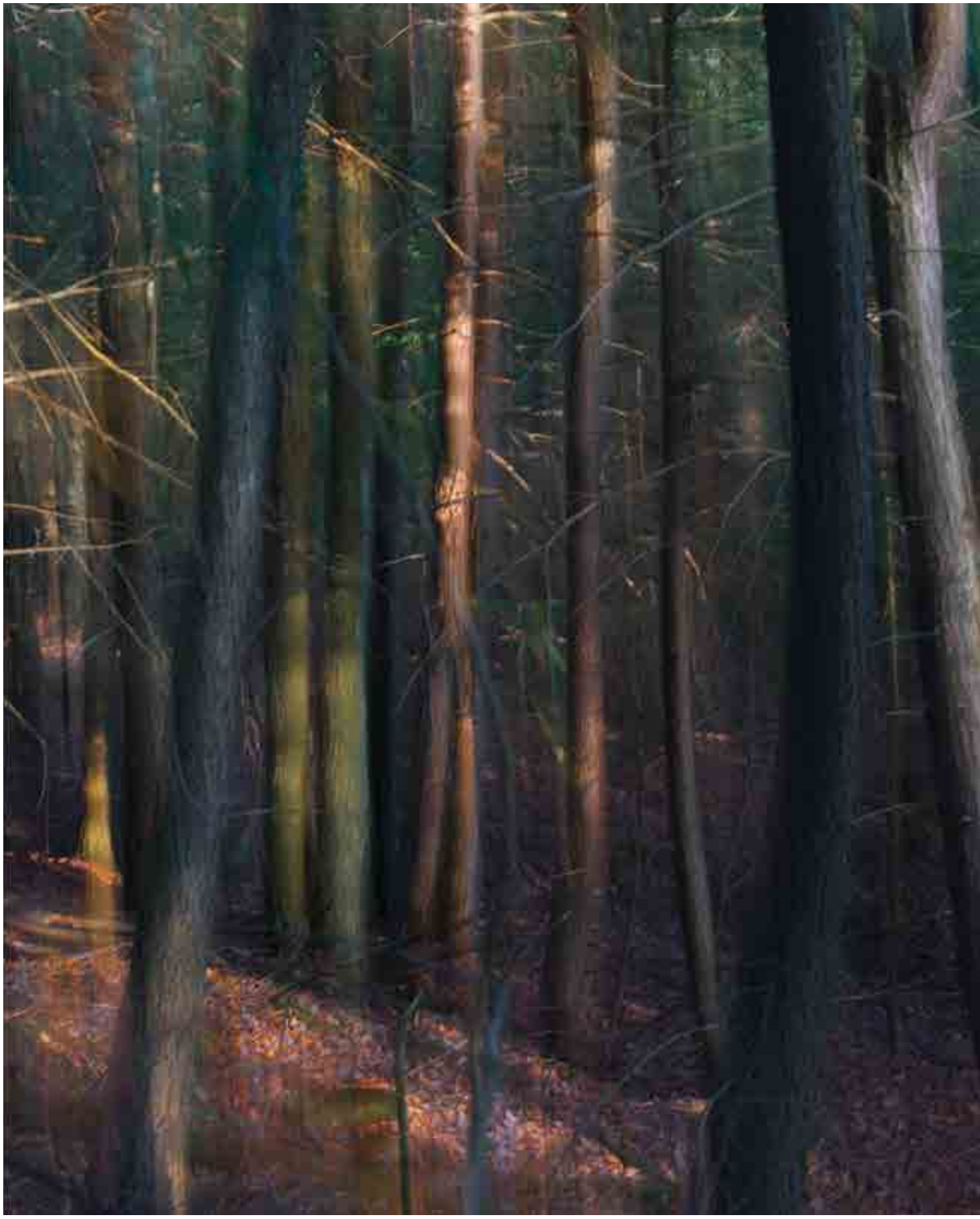
Conférence Mennonite Mondiale
Une Communauté d'Eglises Anabaptistes

3
Inspiration and Reflection
心の健康が教会に影響するとき

8
視点
教会は心の健康をどう考えるべきか?

12
カントリー・プロフィール
タイ王国

16
Resources
世界交わりの聖日、リニューアル2027、MWC執行委員会、平和聖日



Cover Photo:

"Even in our Darkness"

Despite what appears to be darkness, there is light, if we are observant. Look deeply into this scene, which appears dark and somewhat sinister, and see all the light in the details. Sometimes you have to risk it and break through to the next layer, encouraged by the hints of light.

Photo: Ed Lehming, Community Mennonite Church, Stouffville, Ontario, Canada

CORRECTION: in "Joyous hope and faith: Mennonite churches in Eastern Africa" the October 2016 issue, youth leader Daniel Mtoka's name was misspelled.

Courier Correo Courrier

Mennonite World Conference / Congreso Mundial Menonita / Conférence Mennonite Mondiale

Volume 32, Number 1

Courier/Correo/Courrier is a publication of Mennonite World Conference. It is published twice a year, containing inspirational essays, study and teaching documents and feature-length articles. Each edition is published in English, Spanish and French.

César García Publisher
Kristina Toews Chief Communications Officer
Karla Braun Editor
Melody Morrissette Designer
Sylvie Gudin French Translator
Marisa & Eunice Miller Spanish Translators

Courier/Correo/Courrier is available on request. Send all correspondence to:
MWC, Calle 28A No. 16-41 Piso 2, Bogotá, Colombia.

Email: info@mwc-cmm.org
Website: www.mwc-cmm.org
Facebook: www.facebook.com/MennoniteWorldConference
Twitter: @mwcmm
Instagram: @mwcmm

Courier/Correo/Courrier (ISSN 1041-4436) is published twice a year. See https://www.mwc-cmm.org/article/courier for publication schedule history.

Mennonite World Conference, Calle 28A No. 16-41 Piso 2, Bogotá, Colombia. T: (57) 1 287 5738.
Publication Office: Courier, 50 Kent Avenue, Suite 206, Kitchener, Ontario N2G 3R1 Canada. T: (519) 571-0060.

Publications mail agreement number: 43113014
Printed in Canada at Derksen Printers using vegetable-based inks on paper from a responsible sustainable forest program.

編集者から

病いと健康と祝いを覚えて

メノナイト世界会議(MWC)の平和委員長で、コーヒー・フォー・ピースの創業者のジョジー・パントーヤの話を聞いたことがありますか。きっと彼女は平和づくりを以下の四つにまとめて話したことでしょう。

- 創造主との関係の調和(霊的変革)
- 他者との関係の調和(社会的・政治的変革)
- 被造物との関係の調和(経済的・エコロジー的変革)
- 自分自身との関係の調和(心理的・社会的変革)。

私たちが追求する平和は神との平和だけでなく、人間相互の平和、私たちを取り巻く環境との平和、そして私たち自身との平和をも含むものです。

ちょうど私たちが、神につくられた世界において、また他の人々との関係において分裂を経験するように、私たちは自分自身との調和を失うことがあります。私たちの身体は、そして私たちの心もまた、病いに冒されることがあります。健康が身体的・霊的・感情的に影響を受けることがあるのです。

おなかの調子が悪くなったり骨折したりしたとき、私たちは癒しを祈り求め、医師による治療、家族や教会の助けを求めるでしょう。心の健康においても、私たちは霊的な助けだけでなく、専門医療や信仰共同体のケアが必要です。

今号の『クーリエ』では心の健康が特集されています。心の健康が私たちの豊かさにどんな影響を与えるか、私たちがより健やかな心を取り戻すため、いかに多様な方法を必要としているか、さまざまな角度から取り上げます。

さらに今号では、宗教改革をめぐる、信仰と生活委員会の十年がかりの取り組みが始まったことも取り上げています。1517年、マルチン・ルターが95カ条の論題をヴィッテンベルク市の教会の扉に貼り出しました。教会のあり方をめぐるこの声明文が、宗教改革の始まりとされています。

さらにその数年後、私たち自身の霊的祖先が互いに再洗礼を授け合い、教会とはどうあるべきかという理解を提起しました。ときは1525年1月21日、急進的宗教改革とよばれる運動の始まりです。私たちがその日の前後に「世界交わりの聖日」を設けるのはそういうわけです。(17ページを参照してください)

このたび信仰と生活委員会は、十年がかりの記念行事「リニューアル2027」を計画しました。その最初の催しが2017年2月、ドイツのアウグスブルクで開かれました。(18ページを参照してください)

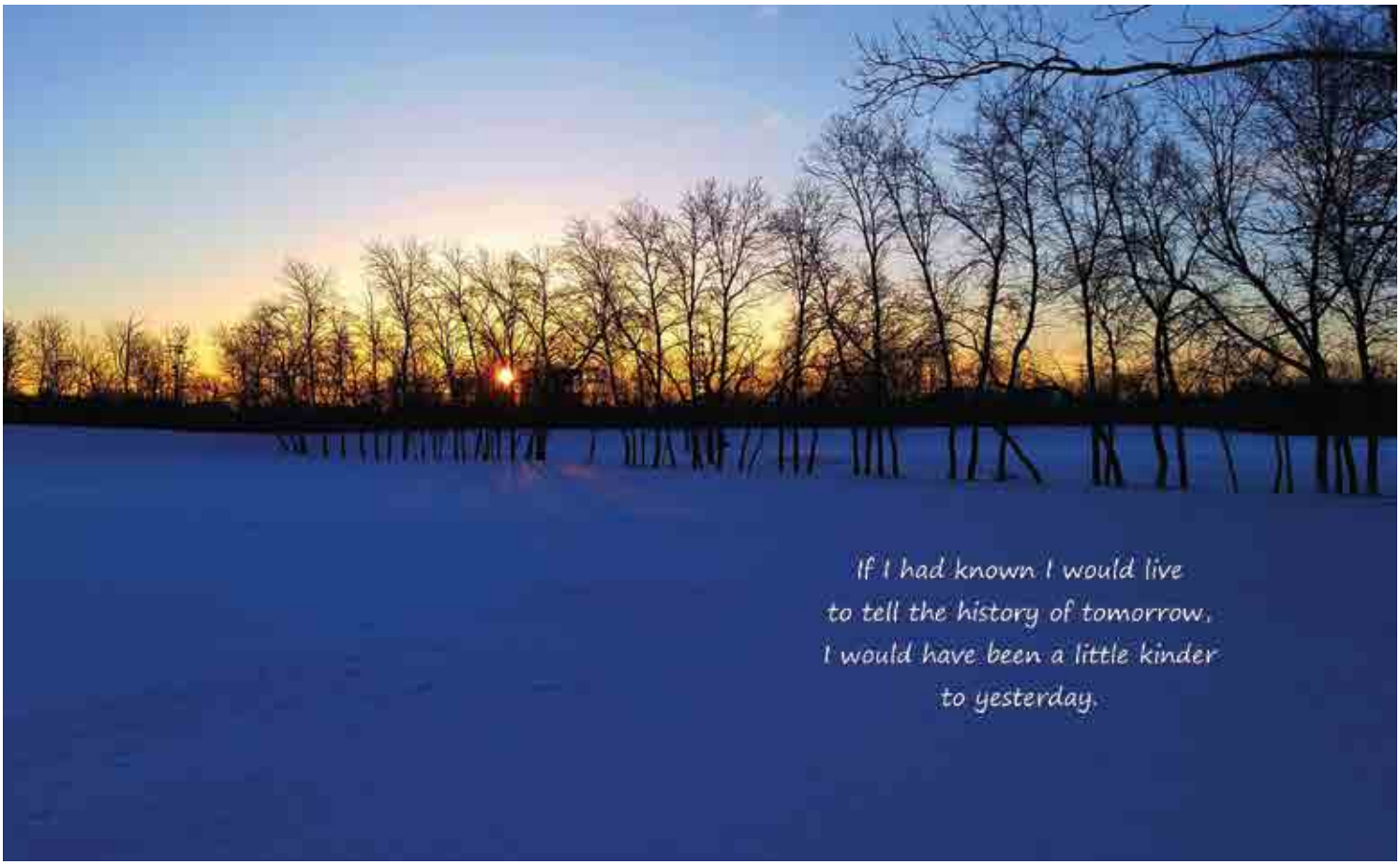
信仰と生活委員会のジョン・ロス事務局長は『ザ・メノナイト』誌で「聖書はしばしば、神の民に『これを覚え』るように、日常生活のいつもの出来事からいったん離れて、過去になされた『神のくすしきみわざ』を思い起こすようにと命じる」といいます。しかし、私たちの運動が教会の分裂から始まったことをふまえて、私たちが「どのように」これを覚えるかが重要だ、ともいいます。

「16世紀に始まったアナバプテスト運動から何が導かれるべきだろうか。告白し放免されるべきことは何か。世界の南の地域の教会との交わりから、どんな新しい信仰のあり方が生まれているだろうか。北の教会は、『教会がつねに改革される(ecclesia semper reformanda)』という神の働きをどのように経験していくだろうか。」

こんにち、世界中のアナバプテスト教会が多くの課題に直面しています。個々人および組織の健やかさについての課題や、暴力に満ちたこの世で平和の民となるための課題、急速に変化する社会で神を証しするための課題などです。この世で神の民としての使命を果たせるよう、顔を会わせて、祈りを通して、また『クーリエ』というメディアを通して、私たちの交わりが強められますように。

カーラ・ブラウン(『クーリエ』編集者、カナダ、ウィニペグ在住)

心の健康が教会に影響するとき



by Joanne Klassen

ベンの両親はわけが分からず、ひどく心配になりました。22歳の息子が病院に連れていかれて精神鑑定を受ける、と電話があったのです。.

ベンはいたってふつうの子どもでした。聡明で創造性があり、楽しいことが大好きで、人にやさしい子でした。それが、このところ彼らしくないふるまいをするようになったのです。人を激しく責めたり、被害妄想を抱いたり、何日もろくに眠らなかったり。

学校生活がプレッシャーだと不平をいい、先学期の成績はひどいものでした。友だち付き合いをしない理由を「極秘のプロジェクトに携わっているから」だというのです。

病院の待合室は人でいっぱいでした。ベンもいました。手錠をされ、両脇を2人の警官にはさまれて座っていました。鋭い目つきでしたが、身体は弱々しく姿勢を崩していました。

彼は両親を睨みつけ、俺を警察に突き出そうとしやがった、となじりました。息子がそんなふうに思っていたなんて、と両親はショックを受けました。

彼らがとてもいたたまれない気持ちになったのは、この小さな町の救急病院の待合室にいた人の多くが、彼らの顔見知りだったからです。ベンは双極性障害なのです。

“Kinder tomorrow”

One of my approaches to achieving good mental health is self-reflection, contemplation and meditation in creation.

Dan Dyck, Home Street Mennonite Church, Winnipeg, Manitoba, Canada

教会がこの世に対して憐れみの光を照らそうとするとき、心の健康を失いつつある個人や家族にどう向き合うべきでしょうか？

双極性障害とは何か

双極性障害には、躁（そう）状態とうつ状態の二つの病相があります。双極性障害にはいくつかのタイプがあり、躁状態とうつ状態の現れ方に違いがあります。

うつ状態の症状には、抑うつ気分、かつて楽しんでいたことへの興味や喜びの減退、焦燥感、体重や食欲の著しい変化、不眠、疲労感、無価値感や罪責感、集中力の減退、死についての反復思考や自殺念慮などがあります。

躁状態では、自尊心が肥大し、眠らなくても元気で、多弁になり、次々とアイデアが浮かび、活動的・衝動的になり、逸脱行動（やみくもな買い物やセックス、ギャンブル、暴走行為）に出ることもあります。

双極性障害の人は、幻覚や幻聴、妄想といった精神疾患をもつこともあります。これらの症状は重いため、社会的に機能することができず、入院を要することが一般的です。

教会の対応は

教会がこの世に対して憐れみの光を照らそうとするとき、心の健康を失いつつある個人や家族にどう向き合うべきでしょうか。教会共同体の第一歩は、苦しむ人の苦しみを認識しそれに寄り添うことです。身体的であれ精神的であれ、教会にいるあらゆる健康状態の人々を包容することに努めるのです。

聖書は私たちに、乏しい人々の世話をせよと命じています（たとえばフィリピ2:1-8、ヤコブ1:22-27、1ヨハネ3:16-18、申命記15:7-11、マタイ25:34-46など）。ホームレスの人々には精神を病む人が少なくありません。双極性障害に苦しむ人の多くは働くことができず、政府の援助があってもせいぜい標準以下の（あるいはもっと劣悪な）住居しか得られず、必要を満たせるだけのお金がありません。

より適応能力の高い人たちでも、学校教育を修了したり、復職したり、ふさわしい仕事を見つけたりするための支援を必要とするでしょう。教会はその人たちが自分で生きていけるよう手助けする方法を見出せるでしょうか。

カナダのマニトバ州には、メノナイト教会が運営するエデン・ヘルスケア・サービスという団体があります。格安ないし一時的な住まいを提供する事業と、地域社会への就労支援事業を組み合わせて行っています。やれる支援、やるべき支援が、まだまだたくさんあります。

“Tranquility and peace with myself, others and nature”

Edith Johanna Muñoz, Iglesia Menonita de Ciudad Berna, Bogotá, Colombia

“Moving Day”

I want to believe that we who are tangled
can find a way through the mess
that chaos and order can learn to live together
in peace

I want to believe that unloading and loading
the mess that is life
is a group effort
is what friendship is all about
as we all search for that residence
of greater health and wholeness

Ruth Harder, Rainbow Mennonite Church,
Kansas City, Kansas, USA

キリスト教の根本価値はまだまだあります。愛、ゆるし、修復、包容、裁かないことなどです。これらを、双極性障害やその他の精神病とたたかう人々に適用していく作業に終わりはありません。教会として私たちに限界があるなら、それは私たちに想像力と決意が欠けているにすぎません。

賜物を大切にすること

もし教会が「からだ」であると私たちが本気で信じるなら、各自が共同体に何を提供できるか本気で問わねばなりません。「体のうちでほかよりも弱いと見える部分が、むしろずっと必要なのです…神は劣っている部分をよりいっそう見栄えよくし、調和よく体を組み立ててくださったのです。」（1コリント12:22, 24）

双極性障害を抱える人たちを、私たちは教会のお荷物と考えがちです。しかし、人はみなそれぞれ賜物をもっています。熱意、演技力、弱さを正直に認めること、精神医療現場の経験など、ほかにももっとあるでしょう。

人が自分の居場所を感じられる最良の方法の一つは、参加者となること、他者に提供できるものをもつことです。「からだ」は多くの部分からなり、私たちが多様性を前向きに受けとめれば豊かになるのです。

裁いてはならない

前述のとおり、双極性障害では思考が散漫になり、衝動的・破壊的な行動に出ることがあります。教会では、望ましくない行為や罪深い行為はやめさせるという「きまじめ」なアプローチをとりがちです。双極性障害は複雑ですから、こうしたふつうのやり方で行動を変えさせようとしても通じませんし、難しい問題を提起もします。

そもそも、人が自分の行いに責任がないのは、一体どういうときでしょうか。物質的な要素は感情や人間関係にどんな役割を果たしているでしょうか、たとえば私たちの脳は人間関係にどのくらい影響しているでしょう。選択と寛容についてはどうでしょう、たとえばある人が私たちが困る行動をとることを選んだとして、人間関係を壊さぬようそれを容認すべきでしょうか。

常識の範疇に収まらない行為には、当然の（ときには法的な）結果というものが伴います。「

人が自分の居場所を感じられる最良の方法の一つは、参加者となること、他者に提供できるものをもつことです。

精神の病いを体の病いと同じように丁寧に扱うような、聖書朗読、祈り、讃美、説教が聞けたら、どんなにほっとするでしょう？

裁いてはならない。裁かれないためである」というイエスの言葉をいかに心に留めるべきでしょうか。医療や司法の現場で、あるいは職場や店先や家庭で、その人の味方をすればいいのでしょうか。

礼拝における心の健康

精神病と診断されることの大きなダメージの一つは、それが差別的な烙印を伴うことです。社会や教会が、不安や誤解から、精神病者への差別を固定化してしまうことがあるのです。

精神の病いを体の病いと同じように丁寧に扱うような、聖書朗読、祈り、讃美、説教が聞けたら、どんなにほっとするでしょう。心の健康について、「あの人たち」ではなく「私たち」という言葉で語り合えたらどうでしょう。

勇気を出して、心の健康のことを憐れみ深く、聡明に、オープンに語ることができれば、教会は、人生や生活が必ずしも順調ではない人たち（それは私たちみんなのことです）が安心して集える場となっていくはずです。

声に出して語られることで、問題はより隠しだてされにくく、恥ずべきこととされにくく、縛りが緩やかとなります。不安や不安からくる反発を生み出しにくくなるのです。

聖書には、苦しみのうちにある人々を慰める言葉が多くあります。礼拝で用いることのできる資料をリストアップしている精神医療団体もあります。

燃え尽き／疲労を防止する

誰にでも教会に何かを提供できるものがありますが、たくさんのケアと支援を必要としている人がいることも確かです。小さな教会や町の場合、緊急の対応や支援を担えるのは特定の個人（あるいは一握りの人たち）に限られることもあります。そのままでは、この人たちはいずれ疲れ切ってしまうかもしれません。

疲労困憊を防ぐ方法はあります。方法を確立するのはたいへんですが、ケアの質を高め、ケアを提供する人たちの生活の質を向上させることができます。

第一に、ケアを多く必要とする人を支援する人たちのグループを作ります。一人が対応できない時間には別の誰かが対応できるようにするのです。グループは、実際の介助、社会関係、霊的なケアなど、異なる能力や役割をもつ人たちで構成します。

第二に、人間関係の境界線を設定します。たとえば「土曜日は家族で過ごす日」と決めて、支援の仕事に限界を設けるのです。境界線をはっきりとさせ、人間関係を明確でわかりやすくすることが大切です。

第三に、自分の限界を自覚することです。たとえば時間の限界（週に2時間以上は割けない）、得意不得意の限界（食べ物は提供できるけど、話をじっくり聞くのは苦手）、自分自身の状態の限界（このごろ自分自身がうつに苦しんでいて以前と同じ支援はできない）などです。

教会は、多様で、ユニークで、さまざまな能力や困難をもった人間によってできているのです。そこに私たちはともに集まって、人間としての共通性を探求し、可能性を開花させてともに成長することができるのです。

この旅路を私たちはともに歩み、困難と喜びの絶えないこの世と出会うのです。私たちのあいだにある人間関係を喜びましょう。

ジョアン・クラーセンは結婚・家族療法と神学の修士号をもち、マニトバ州のエデン・ヘルスケア・サービス勤務をへて、現在はウィニペグ地域保健局の精神医療臨床家として個人でも開業。

本稿はミーティングハウス（カナダとアメリカのアナバプテスト編集者の団体）のために書かれたものを再掲した。

“Tranquility and peace with myself, others and nature”

Mental illness is when I can’t find an answer because I only see one part of the trouble and don’t see through to the situation.

Edith Johanna Muñoz, Iglesia Menonita de Ciudad Berna, Bogotá, Colombia

教会は心の健康をどう考えるべきか？

私たちの精神状態は身体や霊（スピリット）とつながっており、調子を崩すこともあります。今号の「視点」では、世界のアナバプテスト系教会の指導者や健康問題に取り組む人々に、教会が人々の心の健康のために果たす役割について、考えを述べてもらいました。

日本
ストレス管理と心の健康

片野美和子

日本ではストレスが大きな問題になっています。心や身体に不調を覚えると、それはストレスのせいだといわれることがよくあります。ストレスの多くは、職場や家庭、教会における対人関係によるものです。人間関係にストレスを抱えると、内心の平和が失われます。それで「ストレス管理」が重要になるのです。内なる平和をつくり出すために、ストレスを管理する方法を学ぶ必要があります。

ストレスは心の病だけでなく、身体の病も引き起こします。私たちの身体と心はつながっているからです。同様に、身体に不調があれば、心の状態も弱くなるわけです。

心と身体はつながっている

心の健康について考えるとき、身体と心を切り離さないことが大切です。ストレスというと心で感じるものと理解されがちですが、そもそもストレスに反応するのはまず身体の方です。

あなたがストレスを感じたとしましょう。あなたの身体の一部で、筋肉が緊張してこわばるでしょう。身体を緩める方法を知る必要があります。心と身体のストレスを緩める二つの方法として、「感情」と「人間関係の境界線」に注目してみましょう。

まず「感情」、とりわけ否定的な感情です。人間関係で葛藤を抱えると、ストレスとともに他人に対して否定的な感情を抱きやすくなります。私たちは、とくにキリスト教徒として、親切で評判がよくやさしくあるべきだとされるため、否定的な感情をもつと罪悪感を感じます。内心の平和が失われるのです。

私たちはこうした否定的な感情を、どうにか制御するなり取り除く必要があります。困難で時間がかかりますが、まずは人間としてこれら否定的な感情が心に起きることを認めなければなりません。認めた上で、それをどう扱うか学ぶことができるのです。

瞑想と体操（運動、ダンス、散歩など）は感情を解き放つ方法です。私は夫とともに合氣柔術の稽古をしています。これは護身のための武術ですが、私たちは精神修養のために稽古しています。私の場合、合氣の稽古や散歩など、身体を動かしている方が瞑想しやすいのです。カイロプラクターとして、身体のケアをするにも有用だと私は考えています。身体が緩めば心も緩みます。身体が心に影響するのです。

告白の力

キリスト教徒にとって、否定的な感情を取り扱うのが難しいのは、そうした感情があることを認めるのが難しいからでしょう。否定的な感情があるということは、自分自身の中に、あるいは他者との間に、平和がないことを意味するからです。霊的な事柄を話せる信仰の友がいて、定期的に会って祈り合うことができれば、そうした感情を適切に扱いストレスを減らす良い方法となるでしょう。

キリスト教共同体は、私たちが否定的な感情を安心して告白でき、それを神の光のもとに差し出すことのできる場をつくり出す必要があります。私の教会でも、注意深く自分の内心を見つめ、分かち合い、祈るための沈黙のリトリートをもちたいと思います。

もう一つは「人間関係の境界線」です。健全な境界線を保つことを学ぶべきです。日本人は「いや」というのが苦手だといわれます。他者との調和を保ちたいから「いや」というのをためらい、ストレスを感じるのです。教会においても、不健全な境界線が問題を引き起こすことが見受けられます。

私は仲間とともに、境界線について学ぶ会を開いています。ヘンリー・クラウドとジョン・タウンゼントの『境界線（バウンダリーズ）』という本を用いています。聖書において、神もまた境界線をもっていることが書かれています。聖書の物語を境界線の観点から読み解くのは大きな助けになっています。

キリスト教共同体は、私たちが否定的な感情を安心して告白でき、それを神の光のもとに差し出すことのできる場をつくり出す必要があります。

実は合気柔術もまた、境界線について学ぶ方法です。他者との空間的・時間的な「間合い」が、日本の武道ではとても重要です。間合いの感覚は稽古によって身につきます。合気の合（あい）はタイミングとつながりを、気（き）は身体から出るエネルギーを意味します。気を通じて相手とつながるのです。相手は敵ではなく自分の一部になるのです。つながって一つにならない限り、相手を投げることはできません。タイミング、間、つながりの感覚は、他者との人間関係をもつ上でも役立ちます。

心の健康のためには、ストレスに対処し内なる平和をつくり出す術を学ぶことが有益だと思います。瞑想と運動を通して否定的な感情を扱い、人間関係の境界線を学ぶことが役立っています。

片野美和子は札幌のメノナイト教会員

フランス

教会と精神医学：その複雑さについて

アレクシナ・ヨーダー

精神医学の仕事をしていてもっとも驚かされることの一つは、信仰をもちながらも入院して私たちの治療を受ける人の数が少なくないことです。より正確には、キリスト教徒の数が、ということです。

「それはね、患者さんが他の話題よりも信仰や希望について話すことが多いから、そう見えるのさ。」でも、もう少し客観的なところ、たとえば病室に聖書が置かれているかどうかをみてみると、この印象はより確かに思えます。精神病棟はキリスト教徒であふれかえっています。メノナイトのキリスト教徒だって、入院することがあります。

教会のなすべき働きは、安全で健全な人間関係の場であること、人々が教会を自分の居場所と感じられ、教会員が人々を迎え入れ寄り添って歩ける準備が整っている場になることです。

制御不能への不安

キリスト教徒でも精神病に苦しむことがある、と認めるのは容易ではありません。アルツハイマー病になるとか、病気の後遺症で精神が錯乱するとかいうのは、原因を説明されれば理解できます。しかし、精神病の場合は直接の原因を説明できるものではありません。免疫がないわけですから、私たちは恐ろしくなります。理由がわからないなら、自分にはおこりえないなんてどうして言えましょう。正気を失った私が何を言い出すか、どうしてわかるでしょう。どんなに非暴力的なアナバプテストだって、激しい迫害をうけているという思いに囚われたら、周囲を脅かすかもしれません。押しつぶされそうな思いで、私たちは答えを探します。

そんなわけで、「精神病の人たちは、たいてい／ときに／しばしば、何かに取りつかれているんじゃないか」と私たちは考えます。精神病が人間の原罪の結果であるという考えは受け入れがたいものです。その人はきっと何か悪いことをしたから、考えや言葉や行いを制御できなくなったにちがいない。そうして私たちは、病気の責任を、苦しんでいる本人に押しつけて、自分を納得させようとするのです。

フランス精神医学生協会が2013年に行った調査によると、信仰をもつ学生のうち精神科で研修する学生の数は、他の診療科よりも格段に少ないのです。しかし、精神科の患者は他の診療科の患者よりも、自分の信仰について話題にすることが多いのです。

患者は祈るのです。ミサに行くのです。

そこで医師がいぶかります。これら弱い患者たちは、危険なカルトに引きずり込まれる危険はないのだろうか？　彼らを守ってやらなければならないのではないか、でもどうやって？　信仰と狂信の境い目はどこにあるのだろう？

病いの中の信仰

私が勤務する精神病院を訪れる人は、チャペルがあることにすぐ気づきます。部屋を改装してチャペルにしたのではなく、れっきとした会堂で礼拝を行っており、チャプレンもいます。最近、ある精神分析医から聞いたのですが、聖職者たちの方が、信仰の経験から精神科医とは異なる観点をもつため、狂信的な妄想を見極めるのに優れているのだそうです。

精神を病む人たちのため、教会には果たすべき役割はあるでしょうか。まあ、ないはずはないですよね。すでに教会は、統合失調症、双極性障害、慢性うつ病などをかかえる人たちの居場所となっています。あえて言えば、もし百人以上も人が集まる教会があって、心の健康で困っている人が一人もいなかったら、それは教会が教会員のことをよくわかっていないか、受け入れ態勢を疑問視すべきかのどちらかなのです。

わかっていようといなかろうと、教会はすでに関わっているのです。統合失調症の患者は人口の0.8%と推定され、フランスではおよそ60万人です。計算してみてください。あなたの教会にいてもおかしくない統合失調症の人は何人でしょう？　そして実際には何人いますか？　その数が少ないからといって、教会を責めようというのではありません。病気が進行すると、人付き合いから遠ざかったり、他人の提案に抵抗を示すことが多いのですから。

これは私たちの教会にとってかなりたいへんなことではないでしょうか。

さらに、不安という、種々の精神障害に共通して現れる特徴があります。教会は人々を現実にしっかりと足場を築かせ、安心を再確認させる枠組みを提供します。典礼にのっとりいつもどおり行われる礼拝や、助けを提供してくれる人たちに毎週会えること、決して見捨てない家族に参加することです。

世俗的な国の精神科医として、人々がより元気になり、他者と意思疎通ができ、世の中にあって地に足のついた、「ふつうの生活」を送れるよう助けることを、私は仕事にしています。

精神病に苦しむ人々に対して教会のなすべき働きは、安全で健全な人間関係の場であること、人々が教会を自分の居場所と感じられ、教会員が人々を迎え入れ寄り添って歩ける準備が整っている場になることです。精神病者もまた神に創造され、愛され、キリストを信じる信仰を通して恵みを受け取ることのできる人たちだと捉えることです。恐れることなく他者に憐れみの気持ちを表すことは、想像以上のインパクトをもちます。精神障害のある人々をうまく教会に迎え入れていくことは可能であり、素晴らしいことです。彼らは、かつてキリストが地上にいたころ、キリストがいつもその輪の中にいたであろう当の人たちだと、私は確信しています。だから教会も、そうするべきなのです。

アレクシナ・ヨーダーはベルフォール＝モンベリアール出身、フランスのストラスブール・メノナイト教会員で精神科の研修医。

コロンビア
癒しの共同体としての教会

ネイサン・トーズ、ポール・スタッキー

1960年代半ばから、コロンビアでは武力紛争が続いています。子どもを含むおよそ700万人の人々が家を失い、6万人以上の人々が行方不明となり、殺された民間人は60万人近くにもなります。人々は大都市に避難してきて、私たちの教会にたどり着く人もいます。人々はありったけの家財と力強さをもっていますが、同時に多くの悲しみと、コミュニティの喪失と、愛に満ちたはずの神がなさった仕打ちへの疑問を抱えてもいます。正義を渇望し、自分たちを避難に追いやった脅威がここにも及ぶのでは、と実にもっともな不安を抱えています。

コロンビアのアナバプテスト系教会および団体は、私たちを頼る人々の霊的・心理的・社会的ニーズを明らかにすることが重要だと考えました。メノナイト中央委員会（MCC）の協力を得て対応策を検討し、イースタン・メノナイト大学のスター（STAR）プログラムと、MCCの「ストレスとトラウマの癒し」の資料を用いて、貴重な訓練を受けました。

私たちの取り組みの焦点は地元の教会であるとして、信仰共同体が癒しの場となる可能性があると考えました。キリスト兄弟団、メノナイト・ブレザレン、メノナイト教会の共同事業として、教会協同社会心理活動（CEAS）を立ち上げ、地元の教会に助けを求める被害者に対応するためのリソースを提供したのです。

癒しの場となるために

2012年、CEASは住まいを追われ、アナバプテストの教会に参加している人たちへの聞き取り調査を始めました。調査の目的は、避難を余儀なくされた人々が（霊的・心理的・社会的また物的に）癒しを経験できるため、教会がどんなものを備えているか、また何ができるようになるべきかを理解することです。

地元の教会が癒しの場となるために必要だと人々が応えた回答は、驚くほどシンプルなものでした。教会員らは神がそこにおられ、トラウマを抱えた人々に働いてくださる余地を設けてくれた、教会に来る人々を歓迎し、心から関心をもっていることを示してくれた、安全な場所を提供し、悲痛な話に耳を傾けてくれた、他の人に奉仕する機会を用意し、生活を立て直すために励ましてくれた、というのです。教会が、人々とキリストが出会い、神との関係を強めることのできる「からだ」となることが必要なのです。

人々の回答は、精神科医のジュディス・ハーマンやSTARプログラムのキャロリン・ヨーダーが指摘するとおりでした。癒しのプロセスにとって重要なのは、安全、経験されたことの認知、および社会的つながりの回復です。人生の意味の感覚を揺さぶられた人にとって、信仰共同体に受け入れられながらその理解を立て直していくことが、立ち直りに向けて歩みだす助けとなるのです。

トラウマと立ち直る力という観点で聖書を読むと、故郷を追われたイスラエル民族（哀歌3、詩編79、137）や、すべてを失ったヨブ（ヨブ2、19）が苦しみ神を求める姿、詩編にみられる信仰や立ち直り（詩編23、91）、預言者のメッセージが伝える希望（ミカ4:1-4）、イエスによる神の愛の受肉（ヨハネ1:1-14、エフェソ2:17-19）と、私たち教会に対し愛と和解の働きを行うようにとの招き（エフェソ1:23、2コリント5:18-20）が見てとれます。

尊厳が人を変える

被害者の一人、アンドレス（仮名）がボゴタのテウサキージョ・メノナイト教会に来たとき、彼は怒りと不安でいっぱいでした。弟と父を殺した奴らがいつボゴタの町に現れてもおかしくない、といったふうでした。ありのままの自分を受けとめて歓迎してくれたと感じるにつれて、アンドレスはだんだん教会共同体に心を開くようになりました。新しい受けとめ方を探る機会を得て、彼は憎しみを手放し、自身の人生を立て直す作業に自分の尊厳を見出しました。アンドレスの事例が示すとおり、教会が人々を受け入れ、その話に耳を傾けて、コミュニティと信仰とにおいて成長する場を提供することがとても大切です。

聞き取り調査の結果でき上がったのが、人を癒す教会になるための学びの手引きです。各個教会で用いられています。コロンビアのいくつかの地域のメノナイト教会とメノナイト・ブレザレン教会でも使われだしました。この冊子はトラウマの犠牲者に有用であるだけでなく、傷ついたり拒絶されたり失ったりする経験をしたあらゆる人々が、まったき生へと変えられるためにも役立つことがわかっています。冊子には実話、聖書の箇所、練習問題がおさめられ、あらゆる人に適合します。

Study guide for a healing church.

コロンビアは現在、和平協定を実行に移しつつあります。元武装勢力のメンバーを社会復帰させ和解へと進むという難題に、地域社会は直面しています。被害者は真相究明と正義を求めます。新しい形の暴力が起きつつあります。そのような状況で、癒しの共同体として地域の教会は、平和づくりに重要な役割を果たすことができます。ゆるしと悔い改めが可能となる条件を整えることで、暴力の連鎖を断ち切ることに寄与できます。トラウマを癒すことで被害者が自分を責め続けるのをやめさせることができます。人々を受け入れることが社会的つながりを促進し、地域社会の再建に役立ちます。

地元の教会は救いのメッセージを伝えて、長きにわたり癒しと希望の場となってきました。この事業に記録された教会の具体的な経験から各個教会が教訓を得て、癒しと共同体を強める力を増していくことが求められます。

ネイサン・トーズとポール・スタッキーは、MCCの助成で行われている教会協同社会心理活動（CEAS）で働いた。現在、ネイサンはボリビアでMCCワーカーとして、ポールはCEASおよびMWCアンデス地区代表として、働いている。

アメリカ合衆国

全人的な健康

by David Bruce Rose

信仰者の中には、感情や心理にかかわる問題を、信仰がないせいだと考える人が多くいます。そうではありません。確かに、イエスを信じる信仰は、ちょうど私たちの生活のあらゆる部面と同様、感情的な部面をも改善してくれます。他方、私がかかわりをもった人たちの中には、驚くほど深くて強い信仰をもちながら、なお深刻な感情障害に苦しむ人が多くいるのです。

心の問題が起きたときの対処法を知るのは難しいですが、単に信仰がないせいだと考えることは、かえって問題を大きくする可能性があります。

聖書における人間観

感情の問題を理解するには、人間について理解しなければなりません。聖書全体を通してわかるのは、人間が一致したものとして捉えられていることです。

創世記2章の創造物語では、神はアダムを土の塵（物質的要素）で形づくり、神自身の命の息ないし霊（霊的要素）を吹き入れました。アダムは（生き物に名前をつけたように）考え、（女が創られたとき喜んだように）感情をもつものとなりました。また、人は他者との関係をもつものとして、なにより神との関係をもつものとして創られたのです。

アダムは、心と身体と霊とが結び合わされた、まったき人として描かれています。この結びつきが意味するのは、ちょうど慢性痛などの身体の問題が霊的成長を（必ずではなくても）妨げる可能性があるように、うつなどの心の問題が霊的成長を（必ずではなくても）妨げる可能性があるということです。それはまた、霊的成長が身体や心の成長を助ける可能性があることをも意味しています。

必要とされているのに、神が目的を達成しようと差し出されたあらゆる方法を用いようとしないのは、よい管理者の働きとはいえません。

列王記上19章のエリヤの物語は、このことを見事に描いています。

うつに苦しむエリヤ

列王記上19章は、憔悴したエリヤから始まります。カルメル山での勝利に心を躍らせたあと、彼はごくふつうの気分の落ち込みを経験します。彼はまた、アハブ王の車の前をイズレエルまで走って帰り、身体も疲れていました。それに加えて、彼は信仰の英雄とたたえられるどころか、王妃イゼベルによる殺害命令が下っていることを知るのです。

聖書に描かれるエリヤの様子は、「大うつ病性障害」とよばれる精神障害の症状を示しています。彼は不安や悲しみを感じ、他の人たちとかかわることから退いています。希望をもてず、死にたいと思っています。思考も混乱しています。神に従っているのは自分しかいないという不正確な思い込みは、思考障害のせいかもしれません。抑うつは彼の信仰にも影響し、神が自分を守ってくれることを信用できなくなっているのがわかります。

エリヤは自分の唯一の望みが神であることを知っています。だから荒れ野に入って神を探し求めるのです。エリヤが裏切られ、落ち込み、信仰が弱っても、神は恵みと愛をもって応えます。

ここで大事なのは、エリヤに対する神の応答が全人的なものであるということです。神はエリヤの身体、精神、認知、関係、霊性のあらゆる側面にケアをします。神はエリヤにいきなり話しかけたりはしません。エリヤに何が必要かご存知だから、霊的・精神的なケアの前に、まず身体のケアをするのです。み使いを送り、食べ物を与え、睡眠を取らせます。それから神の山ホレブまで歩くよう導きます。休息し、栄養を取り、元気を取り戻したエリヤがホレブに着いてはじめて、神はやっと彼に語りかけるのです。

ついにエリヤに語りかけた神は、エリヤの行動や考えの中にうつを悪化させたものがあることを明らかにします。孤立したエリヤに対し、他の忠実な信仰者（エリシャとイエフ）とともに歩むよう命じ、主に仕える者はもう自分しかいないという不正確な思い込みに対し、「しかし、わたしはイスラエルに七千人を残す。彼らはみな、バアルに膝をかがめず、これに口づけしなかった者たちである」と言われます。そこに確かにいることで、神はエリヤの信仰を修復したのです。

私たちにできることは

私たちが直面する、うつ、不安発作、摂食障害や夫婦のトラブルなど、感情や人間関係の問題への手助けとして、何ができるでしょうか。キリスト教徒が実際にできることはたくさんあります。

- 祈ること。イエスは主であり、すべての癒しの源です。
- 聖書を読むこと。多くの問題について多くのことを教えられます。
- 友人の支えや励ましを求めること。
- 牧師、長老、ベテランの信徒に助言を求めること。
- 確かな情報が得られるよい本を読むこと。
- 癒しと成長をもたらすカウンセリングを神が用いられることもあります。

必要とされているのに、神が目的を達成しようと差し出されたあらゆる方法を用いようとしないのは、よい管理者の働き（スチュワードシップ）とはいえません。

心や人間関係の問題はすべて、神を信じて従おうとしないことの結果であると決めつけるのは間違いです。これらの問題に対処するため、神がどう助けるべきかを私たちが決めるのもまた間違いです。私の恩師はかつてこう言いました。「イエスは、この世の人たちが直面する問題に私たちが直面しないよう守ってはくれない。そういう問題に直面したとき対処できるよう私たちを助けることこそ、イエスのなさることだ。」

デーヴィッド・ブルース・ローズはメノナイト・ブレザレンに属するフレズノ・パシフィック聖書神学校の結婚・家族学教授。『MBヘラルド』誌より改訂し再掲。

墓場から芽生えるいのち

タイの大地にアナバプテストの花を咲かせる

地元の川で洗礼式を行うクムー族の教会員たち.
（撮影：エド・ラッセル）

by Carol Tobin

「タイは宣教の墓場だ。」タイにやって来た宣教師たちは、何十年もこう言われ続けてきた。しかし、神は別の物語を用意していたようだ。その物語はようやく実を結び、しかもそこにはアナバプテストの姿もあったのだ。

まかれた教会の種

今から201年前、アン・ジャドソン（アメリカ人宣教師アドニラム・ジャドソンの妻）は言葉を習得し、ビルマにいたシャム（タイ）人に福音を伝えた。12年後の1828年、最初のカトリック司祭の渡来から260年たって、最初のプロテスタントの宣教師がタイにやって来た。

カトリックであれプロテスタントであれ、1800年代の宣教は信じられないほどの献身と忍耐の連続であった。宣教師は、こんにちでも依然として強固な壁に行く手を阻まれた。仏教とバラモン教の融合を基盤とする強固な社会の結束はほとんど入り込むすき間もなかった。人々に深く根差す自然崇拝も、改宗をためらう理由となった。タイの人々は、ちょうど巧みな外交で抜け目なく植民地支配の危機を退けてきたように、「タイ人であることは仏教徒であること」というアイデンティティの自覚を決して譲り渡そうとはしなかった。

1880年、神は再び、ビルマに据えられた基盤を用いてタイを祝福しようとした。宣教師に連れられたカレン族の伝道師3人が、ビルマからタイの村にやって来た。なんとその村の男は前の晩、神の言葉を携えた3人の教師の夢をみたので、一日中待っていたというのだ。その村のカレン族500人が、悔い改めて神を信じたという。

1900年代になると、一方で自由主義神学、他方で一面的な福音理解という新しい難題が持ち上がった。教会の組織化が進み、長老派の長年の働きによって設立されたタイ国キリスト教団（CCT）などに結実した。宣教師は教育施設も創設したが、社会の状況は依然として福音の証しには抵抗を示していた。1900年代後半になると新しい動きが起きる。中国から退去させられた海外宣教師フェローシップ（OMF）のワーカーが流入し、タイ北部の「山岳部族」に宣教する新しい拠点となった。また、ペンテコステ派もタイで影響力を発揮しはじめた。1980年代には、タイ中央部の人々が、急成長する土着の教会運動の典型とされた。

アナバプテストの初期の宣教

タイにおけるアナバプテストの活動は1960年、メノナイト中央委員会（MCC）とのつながりから始まった。それから15年かけて、MCCはPAXワーカー（海外で代替奉仕するアメリカ人良心的兵役拒否者）をタイに赴任させ、手工芸品を輸出してアメリカで売る事業を立ち上げた。

MCCがこの地域での活動を活発化させたのは、ベトナム人が「アメリカ戦争」と呼んだベトナム戦争期である。1975年、MCCはCCTと協同で難民支援をはじめ、農業技術指導者を赴任させる可能性を探った。MCCとしては、CCTがタイ社会におけるキリスト教会の役割として、

青年リトリートは讃美と食事と遊びをともにしつつ、イエスの弟子になることを学ぶ機会となっている
（撮影：エド・ラッセル）

当時は強調されていなかった人権状況への働きかけに取り組んでほしいという思いがあった。MCCはその後数年間タイにとどまった。カンボジアでは大虐殺が起こっていたが、1977年のMCC現地リポートには「いま起きていることは…確認できない」としか記されていない。1979年には恐るべき事態が明らかとなり、タイに逃げ込む難民の数が急増した。MCCは難民キャンプと再定住支援で重要な役割を果たし、ラオス、モン、カンボジア、ベトナムの難民を援助した。

当時のワーカーは、リバイバルの年月だったと振り返る。「言葉と行い」がともに手を携え、神が不思議なわざを加えてくださった、と。こんにちタイの教会を導く多くの者が、あのときキャンプで奉仕するワーカーの情熱から言行両面の証しを教えられたという。難民支援と、ビルマ情勢に関わる平和教育や人権問題への取り組みは、MCCが1995年に事務所を閉じるまで続いた。

その間に、他のアナバプテスト宣教団体が、タイでの開拓伝道を模索し始めていた。1986年にはキリスト兄弟団（BIC）の世界宣教団が視察旅行を行い、1987年には宣教師夫婦一組を派遣した。この夫婦はバンコク郊外の専門学校に職を得た。宣教師の自活モデルを採用したのは、異文化交流を通して福音を伝え、弟子の道を通して現地の指導者を育成することをめざしたためである。

1990年には、イースタン・メノナイト宣教団（EMM）がワーカーを派遣して宣教の可能性を探った。1992年にはトービン夫妻が10年の任期で赴任し、開拓伝道チームも随行した。1995年には、タイ農村部のもっとも宣教が遅れている地域の一つ、イーサーン地方に拠点をおいた。こうして作られたライフ・エンリッチメント教会は、小グループの礼拝や熱心な地元の指導者など、土着の文化によく配慮した教会を形成し、別の村や地域に宣教のわざを広げている。

国際メノナイト・ブレザレン宣教／奉仕団（現MB宣教団）も同様の視察を1991年に行い、最初のワーカーがタイ北部のナーン県でクムー族の人々への宣教を決断した。シュミット夫妻と伝道チームは村落伝道、教育、農業開発に重点をおいた。継続的な働きにより、タイ・ラオス国境地域のクムー族の人々が、キリストを信じるようになった。

根を張る働き

MCCが何年もかけてCCTと良好な関係を育んだのに対し、これら新しいアナバプテスト系組織はCCTのもとで働くこととはならなかった。各団体は独自に新しい連携を作りビザを取得

した。タイ福音同盟が結成され、タイ国内における開拓伝道を促進していく協力関係が作られた。EMMのグローバル・ミニストリー担当者デービッド・シェンクは、「共同体」を重視する立場から、EMMワーカーが他のアナバプテスト系団体との関係を優先するよう求めた。そのため、開拓伝道チームの指導者は頻繁に会合する機会を設け、祈り合い励まし合うこととなった。集まってリトリートを行うことが慣例となり、新たに赴任するワーカーたちを歓迎する場ともなった。

1998年、ジェネラル・カンファレンスの宣教団（COM）が、EMMのチームと協働するためにカナダ人とラオス人の夫婦を派遣した。最初の任期を終えたあと、夫妻はカナダ・メノナイト教会のワーカーとして、イーサーン地方の別の場所で独自の開拓伝道をはじめた。

2001年1月には、チーム2000が来訪した。10年間の任期を受け入れたメノナイト・ブレザレンの3組の夫婦で、バンコク南部で孤児院と教会を新設し、現在は28人のワーカーがさまざまな地元の人々とともに働き、タイの数カ所に教会共同体が生まれている。

同じ頃、BICの新しい指導者としてマイヤーズ夫妻が赴任した。EMMの招きと勧めにより、ほんの50キロ離れたウボンラーチャターニー県の首府で活動を開始した。近接地域での活動は、宣教のビジョンを共同で発展させるのにも、困難なときにチームが互いに助け合うのにも役立った。

他方で、メノナイト宣教ネットワーク（MMN）はイーサーンの別の所にワーカーを派遣し、ローズデール・メノナイト宣教団（RMM）はバンコクでの活動を強化すべく、RMMが長年宣教してきた中米から第二世代の指導者を送り込んだ。ヴァジニア・メノナイト宣教団も近年、ライフ・エンリッチメント教会と提携して、イーサーン出身者への宣教拠点をバンコクに設けた。保守的なグループは、アナバプテストの宣教訓練学校「グローバル・オポチュニティ学園」（IGo）をチェンマイに設立した。そんなわけで、少なくともチェンマイでは、アナバプテストといえば福音宣教への熱意はもちろん、かぶり物と大家族でも知られている。

タイ北部のライフチェンジセンターで、リーダーシップや弟子の道のトレーニングを受ける人々.
（撮影：エド・ラッセル）

これらの団体すべてに共通するのは、弟子の道を非常に重視していることである。彼らは豊富な経験を通して、聖霊が働いて癒されること、悪の束縛から解放されることがどういうことか、理解を深めている。

関係の構築

アナバプテスト系諸団体を一つにまとめてはどうか、という議論は折にふれて提起されたが、実態にそぐわない大きな組織に縛られない方がいいということになった。そのかわり、連携し合う関係を継続することにほとんどの団体が合意している。

チームの指導者らがアナバプテスト連絡会議として年に2回集まるほか、タイとラオスのアナバプテスト系教会員が集まる会合が3つ設けられている。長年にわたる、文化や社会・経済的な分断や、アナバプテスト／メノナイトの世代的な「教会文化」の違いを乗り越えて、人々がともに集い心を通わせ合うさまは素晴らしい。そんな集まりが、『メノナイト信仰告白』やパーマー・ベッカーの『アナバプテストのクリスチャンとは何か』など、アナバプテスト関連文献の翻訳を後押しした。国際メノナイト・ブレザレン（ICOMB）の信仰告白もタイ語に翻訳された。最近では、初期のアジア宣教や再洗礼派の殉教者の物語を収録したリチャード・ショーウォルターの著作がタイ語で読めるようになった。

消費至上主義と経済繁栄に偏った福音理解が人々に受け入れられやすい昨今、こうしたアナバプテストの信仰理解は貴重である。

アナバプテストのアイデンティティ

多年にわたる健全な関係とリソースが、アナバプテストのアイデンティティを育む上で重要である。しかし、直接の実体験を通して得られるアイデンティティというものもある。

ウボンラーチャターニー県南部にあるライフ・エンリッチメント教会は、EMMのチームリーダーであったジョン・ハーツラーを交通事故で亡くすという悲劇に見舞われた。それは教会が、ゆるしに至る道を歩むという貴重な機会となった。

タイ王国

タイ国キリスト教団モン族第7教区（※）

会員数	1,733 人
教会数	23
責任者	ポルンチャイ・バンチャサワン

クムー族宣教団

会員数	39,250 人
教会数	430
責任者	フォーン・ケオ・ケオヴィレイ

ライフ・エンリッチメント教会

会員数	199 人
教会数	16
責任者	ソンチャイ・ファンタ牧師

タイ国メノナイト・ブレザレン教団

会員数	1,600 人
教会数	20
責任者	リッキー・サンチェス

（※）MWC執行委員会が2017年2月に加盟を承認。

数字はMWC会員地図（2017年2月6日現在）による。

出典：MWC会員名簿2015年版

事故で息子を死なせたドライバーに、イーサーン流の「交わりへの歓迎」を表すトルーマン・ハーツラー氏
（撮影：キャロル・トービン）

教会の人々は何カ月もかけて福音を伝え、無謀な運転で事故を起こしたドライバーを諭した。その結果、ドライバーの洗礼式にジョンの両親が立ち会うことになったのである。彼は教会員らに温かく迎えられ、信仰をともにする家族の一員となったのである。

それから、教会ではトルーマン・ハーツラーを迎えて、アナバプテストの歴史を学ぶ集まりがもたれた。彼は、かつて祖先が、規則に縛られたり無気力になったりして、宣教のチャンスを逃してしまったという失敗について語り、しかし、苦難を耐え忍び、イエス・キリストという唯一の土台（1コリント3:11）にこだわることで、目標が再確認され、神の招きに忠実に応える道がいつも備えられるのだ、と強調した。参加者は一人ずつ立ち上がり、「これこそ私たちのあるべき姿だ。どれほど苦しみ失敗しても、これがアナバプテストのあるべき姿なら、私たちもアナバプテストだ」と語った。まさに墓場からいのちが芽吹いたのである。

現地に派遣された宣教師を通して建てられた共同体だけでなく、現地の人々自身による宣教の流れもある。かつて難民としてアメリカに移り住んだモン族の人々である。その多くが米国メノナイト教会に加わり、モン族メノナイト教会宣教団を設立して、タイ北西部の山岳地帯にモン族のアナバプテストが与えられることを夢見て活動してきた。

2005年からは、北米の牧師やMMNのワーカーが本格的に派遣され、建築計画も進展した。そのため、長くCCTに加わっていた現地のモン族キリスト教徒は、次第に自らの神学がアナバプティズムに近いと感じるようになった。2016年には、CCTの教区として新たに「モン族第20教区」が設けられ、MWCに加盟することになった。ネルソン・クレイビルの言葉を借りるなら、「彼らは、非暴力を含むアナバプテストの教会理解を積極的に言明し広めたい」という気持ちから、加盟を希望したのである。

これらの教会によるさまざまな実践は、MWCにとってまさに賜物である。伝道の一環としての平和づくり、もてなし、信仰に基づく経済実践、分かち合いの精神、熱心な聖書の学び、指導者の育成などである。2017年4月には、MWCとMMNの代表も列席して、加盟を祝う催しがもたれた。

タイのキリスト教徒はいまだ総人口のわずか1.2パーセントにすぎないが、祝福を得てさまざまなアナバプテストの証しが今後も互いに連携し育み合って、かつては「墓場」とよばれたこの地に神が美しい復活のいのちを花開かせてくれるだろう。

キャロル・トービンは夫のスキップとともに、EMMのもとで1989年から2009年まで、タイでの開拓伝道と組織運営に従事した。現在キャロルはハリソンバーグ（アメリカ、ヴァジニア州）にて、ヴァジニア・メノナイト宣教団アジア地域担当者としてタイとのつながりを保っている。

歌と説教と皿と

世界中のメノナイト教会とキリスト兄弟団（BIC）が再洗礼派のつながりを祝う「世界交わりの聖日」が2017年1月22日にもたれ、さまざまな文化の歌と、共通テーマに基づく聖書朗読と、食べ物と献金の分かち合いが行われた。

2017年のテーマは「主は私の叫びを聞いてくださった」。世界的な難民問題や日常生活で困難を抱える私たちに対する神の忠実を思い起こそうという趣旨である（詩編40:1-10、創世記11:1-9、使徒2:1-18）。礼拝の資料はメノナイト世界会議のホームページ（mwc-cmm.org/wfs）からダウンロードでき、世界のアナバプテストの一致を祝うために、年間いつでも利用できる。

コロンビアのイバゲー・メノナイト教会員のオスカル・スアレス氏は「私たちが思い起こすのは、500年前、勇気ある人たちがイエスの真の教えに突き動かされて、命をかけてまで彼に従う決心をしたことです」という。

ベテル・キリスト兄弟団（インド、オリッサ州カタック）のマンジュラ・ロウル氏は「パンを裂いて差し出し、他者の必要を満たすことに意味があります。それで困難がなくなるわけではありませんが、神とともに、神を通して勝利に至ることを確信できます」と話す。

世界交わりの聖日は「兄弟姉妹を励まして、押しつけられようとしている壁を乗り越える決心ができるよう勧めるもの」だというのはオフェリア・ガルシア・デ・ペドローザ牧師（メキシコ、チワワ）。

それは、ドイツのフランクフルトにあるような小さな地元の教会にとって、世界に広がるアナバプテストの交わりの一部であることを喜ぶ機会ともなっている。ドイツ・メノナイト教会協議会のアンドレア・ランゲ氏は「世界中にいる信仰の家族や、迫害されている人々、政治的困難を抱える人々の課題を祈りにおぼえました」と話す。

「難民の現実について話したのはよかった」と話すのは、ボボ・ディウラッソ（ブルキナファソ）のメノナイト教会でマリからの避難民を受け入れたシアカ・トラオレ牧師。新しい会堂の落成に合わせて1月29日に世界交わりの聖日を祝った。「喜びは倍増しました。新しい会堂に新しく7人の教会員が与えられ、仲間とともに神を礼拝することができたからです。」

Photo: Siaka Traoré

Photo: Jan Cees Noord and Jacob H. Kikkert

ブルキナファソのボボ・ディウラッソでは、メノナイト教会の新会堂の落成に合わせて世界交わりの聖日が祝われた。

オランダのグローニンゲンとドレンテのメノナイト教会では、ハーレン・メノナイト教会で世界交わりの聖日を祝った。

クロスローズ・メノナイト・ブレザレン教会（カナダ、マニトバ州ウィニペグ）のマービン・ディック牧師はいう。「世界交わりの聖日は重要な行事です。イエスの教えこそ、キリスト教徒がいかに生きるべきかを決める究極の権威だからです。人々がどう生きるべきか、政府や文化が決めるのではない。聖書が示すイエスの教えと模範に従うのです。」

（メノナイト世界会議）

Photo: José A. Vaca B.

コロンビアのイバゲーでは、セザール・モヤ牧師が世界の移民問題の現状を話し、会衆はMWCの年次報告と映画『ラディカルズ』の一部を視聴し、MWCに献金を捧げた。

「いまも聖書は語る」:リニューアル2027が開幕

【ドイツ、アウグスブルク】アナバプテスト／メノナイトの伝統が500周年を迎えることを記念して、メノナイト世界会議(MWC)が開催する10年がかりのイベント「リニューアル2027」の最初の行事「み言葉により変えられる:アナバプテストの視点で聖書を読む」が2017年2月12日に開催され、アナバプテストの教会指導者が世界各地から集まった。今や地球規模となった再洗礼派運動をキリスト教会全体の中に位置づけて、評価と検討を加えていくためのもの。

自らの聖書理解に基づいて、再洗礼派は当初から、キリストに従う個人的な決意、自発的な信仰告白に基づく洗礼、聖書を共同で読み解釈する姿勢、和解と愛敵へのこだわり、国教制度の否定を打ち出してきた、とアルフレッド・ニューフェルド氏(MWC信仰生活委員会議長、パラグアイ)は言う。

再洗礼派の伝統が500周年を迎えるにあたり、「改めて考え直し、作り直されるべきことは何でしょう。私たちの神学と実践とがかけ離れているのはどんなところでしょう」と、ニューフェルド氏は問いかける。

この一日がかりの集会では、MWC加盟教会の代表らによる奨励や、第16回世界大会の讃美歌集による讃美を織り交ぜつつ、使徒15章1～21節をもとにした参加型の聖書研究が行われ、教会内で意見の対立する話題をめぐる合意形成について学びがもたれた。

フレズノ・パシフィック大学(アメリカ)のバレリー・レンペル教授は、アナバプティズムが今ほど求められているときはないとし、「初期の再洗礼派の精神に立ち返って聖書を読み、神の言(ことば)とわれわれ自身の神学の伝統に立ち返り、今の世でキリスト教徒として生きるため、すべての人々を招く宣教へと歩みだすため、どのような知恵を得られるか」が重要だと呼びかけた。

マカドゥニスウェ・ングルベ氏(ジンバブエ)は「キリストのメッセージにおいて、それを伝える人たちと受け取る人たちの間に差別はありません」という。彼女を含むYAB(ヤング・アナバプテスト)委員会は、マタイ28章19節をもとにして、キリストに従う者として学び、出かけ、分かち合う信徒一人一人の責任を強調した。エベネザー・モンデス氏(フィリピン)は「弟子の道がすべてのキリスト教徒の責任であることを強調するような文化が必要です。キリストの力と恵みを深く理解し、十分に経験することがそれを導きます」と述べた。

他教派のゲストからは、信仰告白の違いを超えて聖書を読むことの重要性が語られた。フリーデリク・ニューセル氏(ルター派、ドイツ)は、個々人で聖書を読んでもリニューアル(刷新)は可能だが、ともに聖書を読めばもっと力強いものになるという。ニューセル氏はモンシニョー・アウグスト=カストロ氏(カトリック、コロンビア)とともに、メノナイト、カトリック、ルター派の三者対話を終えての参加だった。

「キリスト教徒として、イエス・キリストのみ跡に従い始めた私たちは、イエスのように愛し、生き、なによりイエスがなさったように神の国を分かち合いたいと願うものです」とYAB(ヤング・アナバプテスト)で話すマカドゥニスウェ・ングルベ氏

Photos: Harry Unger

Top: 第16回世界大会の讃美歌集を用いた地元の音楽家の指導による讃美

Above: 聖書研究に参加する集会参加者

YABのメンターを務めるティギスト・ゲラグル氏(エチオピア)は、再洗礼派の礼拝、交わり、証し、奉仕の伝統が、聖書の読みを生きた信仰に転換するという。「十字架の道という基本的な教えが、教会の未来を指し示してくれます。」初期の再洗礼派を殉教にまで導いた真理が、こんにちイエスに従うカギとなる。「キリストの受難こそ、福音の中心的テーマです。」

ドイツ・メノナイト教会連合のドリス・ヘーゲ議長は、集会に参加して聖書が生きた言葉であることを実感したという。「私たちは聖書を、自分の今の状況で初めて読むかのように読むべきです。神さまはどんな新しいことを、私たちに語ってくださるでしょうか。」

スイス・メノナイト教会のダニエル・ガイザー=オプリンガー氏も同じように、こんにちのアナバプティズムにとって神の言(ことば)がもつ意味を再確認し、「ともに集い、古い友人や新しい兄弟姉妹に会えた」と集会での交わりを評価した。

「リニューアル2027」の次回イベントは2018年4月、聖霊をテーマとしてケニアで行われる。

アウグスブルク集会はジョン・D・ロスを中心として、ヤンティネ・フースマン(オランダ)、エンク・ステンバース(オランダ)、ライナー・ブルカート(ドイツ)からなる現地企画委員が計画した。

(メノナイト世界会議)

平和聖日

平和教会の刷新がかけはしとなるように

さまざまな違いにより分断されたこの世にあって、キリストの平和の道をつらぬく平和教会であることは簡単ではありません。宗教改革から500年の節目を迎え、メノナイト世界会議はあらためて、違いを乗り越えるかけはしを築き、平和の働きに取り組む決意をします。

キリスト友会（クエーカー）およびブレザレンとともに、メノナイトは歴史的平和教会の一つです。世界規模の信仰の交わりとして、MWCは2017年9月24日を平和聖日として記念します。

皆さんの教会は、かけはしとなるために、どのような意志と忍耐をもち、あるいは犠牲をはらう用意があるでしょうか。

ぜひMWCのホームページ（mwc-cmm.org/article/peace-sunday）をご覧になり、教会で平和聖日を覚えるためのリソースを活用してくださるようご案内します。

（MWC平和委員会）

忠実なしもべにお別れを

今年、メノナイト世界会議でもっとも長く奉仕した働き手の一人が退職する。その名前は知らなくても、その働きを知らない人はきっといないだろう。

カナダのオンタリオ州、ウォータールーに住むグレン・フレッツ氏がデザイナーとして働き始めたのは1978年。ポール・クレイビル氏に依頼され、第10回世界大会のデザイン一切を引き受けたのだ。さまざまな言語による出版物のデザインから、文化の違う人たちにも文字を使わずに理解できる案内表示、大会のロゴマークなどを作成した。

十字架と地球を組み合わせたシンプルで印象深いロゴはフレッツ氏によるものだ。こんにちでもMWCとすぐにわかるシンボルとして用いられ、私たちのアイデンティティの目に見える土台となっている。

40年以上にわたってフレッツ氏が手がけたデザインは、『メノナイト世界年鑑1990年版』、大会讃美歌集（1990年、2003年、2009年の各版）、各種のパンフレット、『会員名簿』（2012年版、2015年版）、MWC世界地図（2009年版、2015年版）、第16回世界大会（米国ペンシルベニア州ハリスバーグ）の会場案内表示などだ。

フレッツ氏はまた、カナダのオンタリオ州セント・ジェーコブズのビジター・センターにある、MWCの紹介展示のデザインも行った。

2012年、MWCのロン・レンペル渉外統括責任者はフレッツ氏をビジュアル・アイデンティティ顧問に任命し、MWCの広報デザインが将来のニーズに応えられるよう基準となるマニュアル作成にあたらせた。これをうけフレッツ氏は、ロゴに英仏西の3カ国語でMWCを

ペンシルベニア2015大会でデザインした計画地図と会場案内表示の前に立つグレン・フレッツ氏
（バイロン・レンペル・パークホルダー撮影）

配したサイン、レターヘッド、印刷物（パンフレット、ポスター、報告書、資料、宣伝広告、展示物や横断幕、しおりなど）のひな形、ウェブサイトや『MWCインフォ』（メールマガジン）、フェイスブック、パワーポイントなど、電子媒体用のひな形などを制作した。機関誌『クーリエ』のデザイン改訂にも携わった。

フリッツ氏が最後に手がけたのは、米国ペンシルベニア州ハリスバーグで開かれた第16回世界大会での講演や活動を記録した、大会記録である。大会記録はインターネットで閲覧できる（https://www.mwc-cmm.org/article/pennsylvania-2015-1）。

フリッツ氏のデザインは、これからもMWCから提供される情報発信を、言葉の違いを超えてわかりやすく伝え続けるだろう。

（カーラ・ブラウン）

あなたは、聖書を読んでどのように変えられましたか？

私は毎日聖書を学びます。毎朝聖書について瞑想します。毎晩、家族とともに礼拝のときをもち、説教に与ります。私が説教するときも、妻や子ども、まだ8歳の子どもすら、回り持ちで説教するのです。

—ガルシア・ペドロ・ドミンゴス（メノナイトコミュニティ教会、アンゴラ）

み言葉を読むことで、物事にはもっと別の方法があることを教えられます。この世のやり方にならうだけでなく、変わることのない主のみ言葉にならうべきだということです。聖句の理解はたえず進化し、異なる解釈を聞くのはよいことで、豊かにされる経験です。中でもつねにカギとなるメッセージは愛であり、私たちの生活にもっとも必要なことです。

—エステル・マルティン・マロール（アナバプテスト・メノナイト・キリスト兄弟団、スペイン）

私が聖書を読んで変えられたのは、み言葉に入り込めば入り込むほど、日常生活において聖霊がみ言葉をいっそう私に思い起こさせ、神が望まれる方向に生きるよう促されるからです。

—ラリッサ・スウォルツ（保守メノナイト教団、米国）

MWC執行委員会：熟議し、歓迎し、祝う

【コロンビア、ボゴタ】メノナイト世界会議（MWC）の「リニューアル2027」（宗教改革におけるアナバプティズムの誕生を記念する10年がかりのイベント）を始めるにあたり、執行委員会がドイツで開催され、記録的な数の新入会員が参加を認められた。

アウグスブルク（ドイツ）で2017年2月12日に開催された集会「み言葉によって変えられる：アナバプテストの視点で聖書を読む」をはさんで、執行委員会、4つの委員会、ヤング・アナバプテスト（YABs）委員会がもたれ、MWCスタッフと各地域の代表者が集い、交わりと意思決定を行った。MWCがルーテル世界連盟とキリスト教一致推進評議会（カトリック）とともに数年がかりで行ってきた三者対話の最終会合も、このときにもたれた。

執行委員会では、メノナイト世界会議の正会員数が105教会団体と1国際団体となることが報告され、今後の新規入会とあわせて2018年の総会で承認される予定。オーストラリア、メキシコ、イギリスの教会団体は休会ないし閉会扱いとなった。新たに加えられたのは、キリストの教会モン第7区（タイ）、ブラジル・メノナイト福音教会会議（COBIM）、プエルトリコ福音メノナイト教会会議（以上、正会員）、ウガンダ・メノナイト教会、オーストリア・メノナイト自由教会、ポルトガル・メノナイト教会連合（以上、準会員）。

執行委員会はまた、総会に対し、MWCの名称変更を検討するプロセスを開始するよう、提案した。今後数年かけて、各地域代表が教会指導者らとともに、より包含的な名称について検討を行う。

写真：意見を述べるポール・フィネハス（インド）執行委員と見守るアグス・セティアント（インドネシア）委員
（ウィルヘルム・アンガー撮影）

グローバル・アナバプティズム研究所のジョン・ロスは、グローバル・アナバプテスト・プロファイルについて説明した。この調査は英語で刊行（電子版はwww.goshen.edu/isga/gapにアップ）されるほか、スペイン語やフランス語など5言語に翻訳される予定。

12月に集中する献金を財政計画に反映させやすくするため、執行委員会は2017年暮れにインターネット会議を行い、会計年度の終わりを2018年8月31日に変更する手続をとる。

現事務局長の6年の任期が、2018年に満了する。執行委員会は全会一致で、セザール・ガルシアの2期目への再任を要請した。ネルソン・クレイビルMWC会長はドイツのことわざを引用し、MWCが求めるのは「羊毛を生やし、乳を出し、卵を産んで、最後は肉になる豚」のような働き手だ、と述べた。「大きな責務にも関わらず、セザールは熱心に働き、MWCのビジョンをもち、さまざまな仕事や役割で効果的に働いてくれる。もう1期務めてくれることをうれしく思う。」

各委員会では、平和委員会でジェレマイア・チョイ（香港）がチョン・ナムシク（韓国）に代わって委員となり、YABs委員会のラテンアメリカ代表がドミニク・ベルゲン（パラグアイ）からオスカル・スアレス（コロンビア）に交代した。

クレイビル会長は言う、「イエスに従う70人が世界中から、16世紀のアナバプティズムの歴史的中心地に集まった。教会の過去と未来が生き生きとした形で出会った。ここアウグスブルクで、アナバプテストの宣教を引っ張る今日の証し人たちが、礼拝し、ビジョンを共有し、議論し、計画し、ともに笑い、ときに泣いた。洗礼について三者対話に取り組んだカトリックとルター派の代表と交わりをもてたことはとりわけ喜ばしい。友情を作り上げ福音に共通の希望を見出すことは、私たちすべてを勇気づけるものであり、ともにこの世に証ししていく力となるだろう。」

（メノナイト世界会議）

私がうんと幼いときから、聖書は私の人生を変えてきました。ありがたいことに、母親から手ほどきを受けました。毎日、昼食後に聖書を読むのはとても大切でした。私たち自身の現実やおかれた状況に従って聖書を学ぶことがますます必要だと感じます。聖書を読んで神の言（ことば）を生きることは、とても多様で異なっていると思うからです。
—グラディス・シーメンス（ブラジル・メノナイト教会連合、ブラジル）

Give a gift to MWC

Your prayers and financial gifts are deeply appreciated. Your contributions are important. They will:

- Enable and expand communication strategies to nurture a worldwide family of faith,
- Strengthen our communion's identity and witness as Anabaptist Christians in our diverse contexts,
- Build up community through networks and gatherings so we can learn from and support each other.

Go to **www.mwc-cmm.org** and click the "Get involved" tab for prayer requests and on the "Donate" table for multiple ways to give online.

Or mail your gift to Mennonite World Conference at one of the following addresses:

- PO Box 5364,
  Lancaster, PA 17808 USA
- 50 Kent Avenue,
  Kitchener, ON N2G 3R1 CANADA
- Calle 28A No. 16–41
  Piso 2, Bogotá, COLOMBIA

MWC Publications Request

I would like to receive:

MWC Info
A monthly email newsletter with links to articles on the MWC website.

- ☐ English
- ☐ Spanish
- ☐ French

Courier
Magazine published twice a year (April and October)

- ☐ English
- ☐ Spanish
- ☐ French

- ☐ Electronic Version (pdf)
- ☐ Print Version

☐ Mailing delays? Consider the benefits of electronic subscription. Check this box to receive your *Courier/Correo/Courrier* subscription via email only.

Name

_____

Address

_____

_____

_____

Email

_____

Phone

_____

Complete this form and send to:

Mennonite World Conference
50 Kent Avenue, Suite 206
Kitchener, Ontario N2G 3R1 Canada

YAMEN participants Dina Molina and Marlly Aceituno from Honduras.
Photo: Janet Plenert

弟子をつくる共同体

以前、私が親類をひどい仕方で亡くしたとき、ある教会員に言われました。「泣かないで。聖書のこの箇所を読んで。」でも私は彼女の言うことが聞けませんでした。私が必要としていたのは、私の話を聞いてくれて、一緒に泣いてくれて、この深い悲しみの中をともに歩いてくれる人だったからです。聖書の教えではなく、友達が必要だったのです。

何年か前、ある教会の牧師が言いました。「私はカウンセリングなんて信じない。誰かの言うことに頼るより、神の言葉に従うすべを知る方が大事だ。助言なんて依存体質を生むだけだ。」数年たって、私は彼の教会の教会員から、親類が末期の闘病中にどんなに寂しく見捨てられたと感じ、教会を恨みに思っているかを聞かされました。教会員が苦しみ、疑問に悩み、希望を失っている辛いとき、この牧師はいったいどこにいたのでしょうか。

困難なとき、一緒に歩んでくれる誰かが、私たちには必要です。葛藤や憎しみ、病気や死に直面しているとき、他者の支えが必要です。知恵のある人たちに助けられて、自分の弱さや強さを自覚し、問題の原因を見つけることが必要です。セクシュアリティやお金の管理の仕方について、また重大な決断（結婚、子育て、就職、退職、その他の決断）を求められるとき、キリスト本位の導きが必要です。

言い換えるなら、私たちは「弟子の道」を必要としています。キリスト教カウンセリングは、助言を与えたり、こうすべきだとかすべきでないとか命じたりすることではありません。それはまず他者とともに歩むことであり、歩みに寄り添って、その人がキリストに従うという決断に基づいて答えを出せるよう助けることなのです。それこそが「弟子の道」の意味です。日常生活においてキリストに似るものとなり、そうなるために憐れみ深い共同体の仲間に同伴してもらい、具体的な問題を扱うのを助けてくれる特別な賜物のサポートが必要になるのです。

こんにち、キリスト教徒のあいだでも、コーチング、セラピー、霊的指導、メンター、牧会、カウンセリングなど、弟子の道はさまざまな名で呼ばれます。それだけ、弟子の道に関係したニーズがとても大きく、特定の領域で役立つ専門性をもつ人々がなかなか見つけにくいのだということの表れなのでしょう。たとえば、「うつ」や学習障害などは、専門の訓練を受けた人がカウンセラー／指導員として奉仕することが求められる領域です。

基本的には、弟子の道を歩もうとする人たちとともに歩む機会は、私たちすべてにあります。とても困難で苦しいときであっても、苦しんでいる人々に対し、そばを離れず憐れみ深く、空疎な言葉や助言を慎む姿勢を保つことはできます。ただ耳を傾けるのです。暴力や苦難を経験している南の地域の教会の多くは、積極的な傾聴によって人々をサポートする方法を学んでいます。人を裁かない態度でただそこにいるというふるまいが秘めている癒しの力を発見したのです。ここでもまた、深い憐れみがとくに重要です。

しかし、南の地域の多くが、より専門的なカウンセリングの働きを大いに必要としています。心の病気をいかに扱うか。特別なカウンセリング技術を要する「記憶の癒し」をどう進めるか。どうすれば北の地域にある膨大なリソースを南の地域にある教会と分かち合うことができるか。ここで言うリソースとは、カウンセリング、紛争解決、メンター、セラピーなどの教育資源のことです。

今号の『クーリエ』は、これらの問題について教会にもっと語ってほしい、もっと多文化的に語ってほしい、という願いの表れです。弟子をつくりなさいという招きにこたえてともに成長するために、私たちは教育資源、経験、そしてニーズを分かち合う必要があります。

神が世界中の教会を導いてくださり、憐れみをもって歩み、癒しの共同体として奉仕し、弟子づくりの招きを真剣に受けとめるものとしてくださいますように。

セザール・ガルシア氏はMWC事務局長。ボゴタ（コロンビア）の本部オフィス勤務。